『西南アジア研究』No. 81, 2014

西アジアの石像
――新石器時代――

林　　俊雄

はじめに

人はなぜ大きな石像を作るのか。日本では古墳時代後期に主として九州北部の前方後円墳に武装した石像が立てられた。人物埴輪との関連が指摘されている。中国では，後漢[1]以降貴人の墓や皇帝陵に石像が立てられた。護衛や近侍を表していることがほとんどである。イースター（パスクワ）島の人々はなぜモアイ像を立て始め，なぜ突然やめたのか。ユーラシアの草原地帯では，青銅器時代以来各地に石像が出現した。古墳や墓所，祭祀遺跡に立てられていた。また地中海と黒海沿岸地域にも新石器時代から青銅器時代にかけて anthropomorphic stela「人型石柱」とか statue-menhir「彫像立石」などと呼ばれる石像がある。これらはそれぞれ専門的な研究の対象として多くの研究が発表されている。

それらに比べると，西アジアでは近年新石器時代初期の石像が数多く発見されているにもかかわらず，今のところ石人がまとまった形で検討されることはない。そのような状況を考慮して，本稿では今後の研究を期待しつつ新石器時代に西アジアで作られた石像を，隣接するバルカンや地中海世界の石像と比較しながら，包括的に紹介してゆくことにする。また等身大ないしそれ以上の石像はしばしば巨石構造物に伴って出土する。そこで巨石構造物にも注意を払いつつ進めて行くことにする。

I　マルタ島

世界最古の巨石構造物として1970年代初めに突如登場した場所は，地中海のマルタ島であった。マルタ島に巨石構造物があることは古くから知られていたが，1950年代頃まではクレタ島のミノア文明やギリシア本土のミュケナイ文明からの影響とみなされて，それらよりも早い，すなわち前2千年紀よりも早いことはありえないと考えられてきた［Evans 1959 : 66, 164］。しかしその後，放射性炭素年代測定法と樹輪較正が導入されるや，寺院の

1）　前漢でも例外的に武帝に仕えた武将の霍去病の墓に多数の石像があるが，ほとんどすべて動物の形象で，人間は唯一，馬に踏みつけられた「匈奴」だけである。

年代は一挙に古くなってしまったのである［Bonanno 1999 : 101］。

一連の資料によると，マルタ島とそれに隣接するゴゾ島に人類が登場したのは前6千年紀末頃のことで，おそらくシチリア島から渡って来たものと考えられている［Cunliffe 2008 : 171］。当初はそれほど特徴のない新石器文化が存在していたが，前4千年紀になると特異な巨石文化が栄え始める。その特徴は，大きな板石を立てて組み合わせた円形の部屋を2〜4基つなぎ合わせた「寺院」にある（図1-a）ため，この時代は寺院時代と呼ばれる。円形の部屋が複数繋がっている構造は，後述するギョベクリ・テペのそれ（図3-a）と似ていると

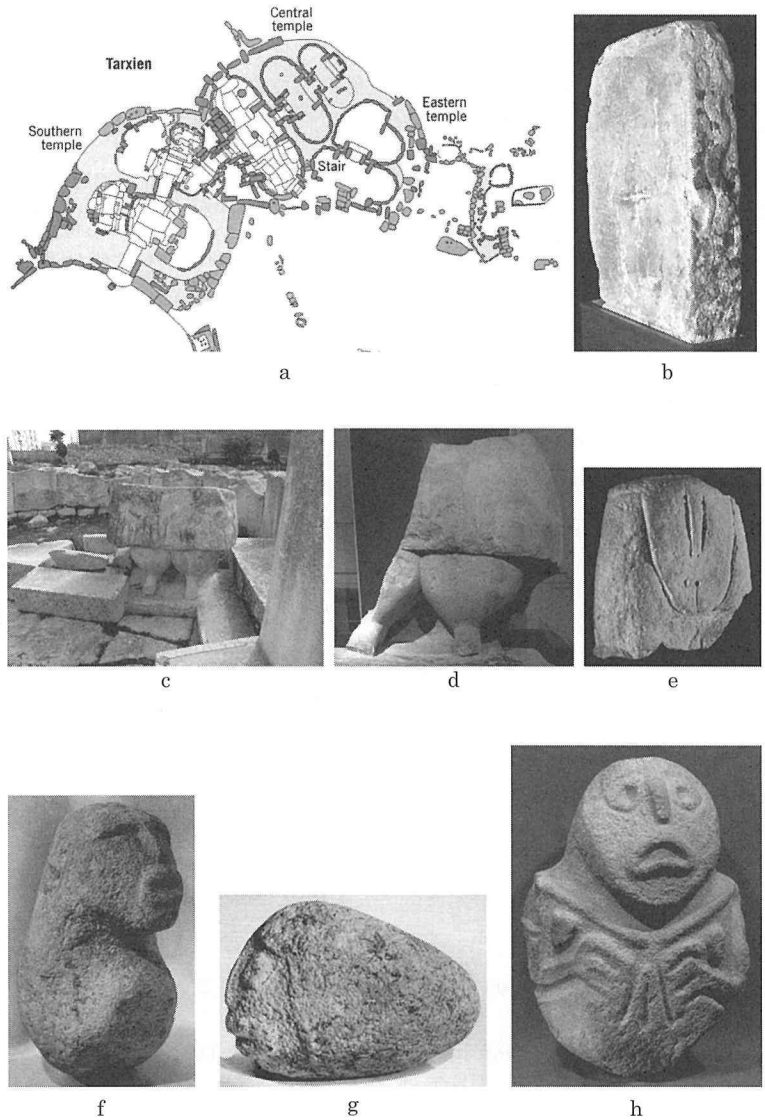

図1

いう指摘もある［Harmanşah 2011 : 627］。これらの寺院からは大小様々な土製あるいは石製の太腿と腰がきわめて豊満な像が出土しているが，そのうち最大のものは，下部しか出土していないが，高さが 2.5 m とも 3 m とも推定されている（図 1-c, d）。これらの像は乳房が付けられたものもあることとその豊満さのゆえにもっぱら「女性像」，とりわけ「地母神像」と考えられているが，性別を示す特徴がないものも多く，豊満であるがゆえに「女性像」と決めつけることには批判もある［Townsend 2007 : 76］。なお寺院の中で男根型の石柱や男根を象った小像は多数発見されている。

これらの寺院が建設された時代は前 4100 または 4000～2500 年とされ，巨大な石像が出土したマルタ島東南部のタルシエン Tarxien 遺跡はその中では最後のタルシエン期[2]に属する。ただし寺院時代で最も古いゼッブージュ Żebbuġ 期[3]の埋葬遺跡から，鼻と顔の輪郭だけが表現された statue-menhir 石像ーメンヒルの頭部の断片が発見されたため（図 1-e），ほぼ等身大の石像が寺院時代の最初から存在していたことが判明したのである。なおこの人面石は，集団埋葬を納めた地下岩窟墓の入口を閉塞するように置かれていた。ほぼ同じ人面石がもう 1 点発見されている［Trump 2002 : 45］。

このような展開を受けて，レンフルーはマルタ島の巨石構造物が地中海地域では他の全てに先行し［Renfrew 1972 : 141-144］，そのうちのいくつかは世界で最古の巨石構造物と認めたのである［Renfrew 1973 : 147 ; レンフルー 1979 : 173］。言い換えると，マルタ島の巨石構造物は他からの影響を全く受けずに独自に生まれたということになる。とすれば，西北ヨーロッパの巨石構造物も高文明からの影響を受けずに生まれた可能性がある。各地の巨石構造物はみなその地方独自の産物だという説が出てくることになる［Renfrew 1973 ; Turnbull 2002］。ジュガンティーヤ Ġgantija 遺跡（前 3400～3100 年）から出土した平板な石柱の狭い面に蛇が浮彫されているものは（図 1-b），後述するアナトリア東南部の初期新石器時代に見られる石柱（図 3-c，4-d）を想起させるが，ただ似ているというだけでは関係があったという証拠にはならない。レンフルーは比較的最近の著作でも，他地域からの伝播説や「地母神像説」，西北ヨーロッパの巨石文化との関係，巨石構造物を「cult center 信仰の中心」とする考え方については，否定的態度をとっている［Renfrew 2007 : 10-11］。

2） 前 3000～2500 年［Bonanno 1999 : 105 ; Abell 2007 : 159］，あるいは前 3100～2400 年［Malone *et al.* 2009 : 1］。

3） 前 4000～3800 年［Bonanno 1999 : 105］，あるいは前 4100～3700 年［Malone *et al.* 2009 : 1］，前 4200～3500 年［Abell 2007 : 159］とされ，時代的には銅石器時代とする見方［Malone 2008 : 9］もあるが，寺院時代全体も後期新石器時代とする説の方が一般的［Abell 2007 : 29 ; Barrowclough 2007］。いずれにしても，金属器が道具としてはまだ使われていない。

Ⅱ　レペンスキ・ヴィル Lepenski Vir（バルカン北部）

マルタ島が注目されるようになったのと同じ頃，同じく放射性炭素による年代測定により，ヨーロッパで最古の石像を標榜する遺跡が脚光を浴びつつあった。それは，セルビアのドナウ河畔にあるレペンスキ・ヴィル集落址と，そこから出土する多くの丸石砂岩製石像のことである［Srejović 1972 ; Mithen 1994 : 132 ; Cunliffe 2008 : 81］。この遺跡はドナウ川の両岸に崖が迫り，川幅が狭まったところ，通称「鉄門」のセルビア側に位置している（対岸はルーマニア）。住居址はプランが台形で中に炉址があり，その周りに砂岩製の石像が発見された。発見された石像は 10 数体で，大きさは 9～62 cm［Borić 2005 : 38］とそれほど大きくはなく，その多くは顔だけあるいは顔よりやや大きい胴体が付いているだけのダルマのような丸い造形である。目と口，連続した眉毛と鼻が，浮彫で表現されている。初期の Ib 期には写実的な顔を持つ像もあるが（図 1-f），I-c 期以降は顔の表現が誇張され，口はへの字形をしているものが多く，それを魚の口とする見方がある。その見方によれば，これらの石像は毎年大チョウザメがたくさんドナウ川に戻ってきてほしいという願いを込めて作られたものであるという［Cunliffe 2011 : 81］。たしかに人面の背後が長く伸びた像は，横から見ると魚の体のように見えなくもないが（図 1-g）［Srejović 1972 : 110］，鰓や尾が表現されているわけではなく，口以外には魚に似たところはない。

マリヤ・ギンブタスは図 1-h（高 51 cm）の胴体両脇の浮彫を乳房，胴体下部の鋭角三角形と沈線を女陰，手の先を猛禽の鉤爪とみなし，全体で魚，死と再生の女神を合体させたイメージと解釈している［Gimbutas 1999 : 31］。ギンブタスは思い込みの激しい傾向があり，何でもかんでも女神と結び付けたがるので注意が必要である。発掘者のスレヨヴィッチはこの石像を男性とみなし，背面に見られる背髄のような線刻文様は人体の各部を表現しているというよりは透視描法による骨格の表現と判断している［Srejović 1972 : 110］。透視描法による骨格表現は，東欧の青銅器時代の石人にときどき見られる［林 2005 : 126-128］。

この遺跡は中石器時代から新石器時代にかけて存在したと思われるが，最近の放射性炭素年代測定法の結果によれば，多くの台形住居址は 6300-5500 cal. BC の初期新石器時代に属するという［Borić 2005 : 38］。この集落址にはまた多くの埋葬が発見されているが，それらの年代もやはり中石器時代から新石器時代にかけて存在し，埋葬と住居との関連を判断するのは難しい。埋葬がプラスター（石膏）張りの床の下にある場合と上にある場合とがあり，また建物の外にある場合もあるからである［Borić 2005 : 45 ; Bonsall *et al.* 2008 : 189-191］。さらに人骨を放射性炭素年代測定法で調べる場合，淡水魚を食事したことにより炭素年代が最大で 500 年ほど古く出る誤差を修正するかどうかという問題もある。いずれにしてもこの遺跡はまだ多くの謎に満ちており［Borić 2002 : 1038］，残念ながら石像の正確な年代や意味するところもまだ判断するのは早計と言わざるを得ない。

Ⅲ　アイン・ガザル 'Ain Ghazal（ヨルダン）

マルタ島の石像は時代的には後期新石器時代か銅石器時代とされ，レペンスキ・ヴィルの石像は大きくても高さが 62 cm と等身大よりははるかに小さい。一方 1980 年代になると，それらよりもさらに古く，等身大とまではいかないものの高さ 100 cm 前後の大型の人間像が，西アジアの新石器時代の遺跡で発見された。それは，ヨルダンの集落址アイン・ガザル遺跡から出土した人間像である［Grissom 2000 : 25 ; 藤井 2004 : 68-69］。ただしこれらは石像ではなく石灰漆喰像ではあるが，人間像という点で共通するところがあるので，取り上げておきたい。この遺跡ではまず 1983 年に PPNB（先土器新石器時代 B 期）の層を発掘中に，大小様々な 20 体を超える像が収納された穴蔵が，壊された住居の床下に発見された［Rollefson 1983 : 30］[4]。像と接して採集された 2 点の炭化物を放射性炭素年代測定法で分析したところ，非較正年代で 6750±80 BC と 6710±80 BC という年代が得られ，較正するとそれぞれ 7723±122 BC と 7654±121 BC になるという［Grissom 2000 : 26］。1985 年にもう 1 つ穴蔵が発見され，さらに 7 体の像が出土した。そこで発見された像の下から採集された炭化物は，非較正年代で 6570±110 BC，較正すると 7580±110 BC となる［Grissom 2000 : 26］。

それらは胴体から上のみを表した「胸像」タイプと，頭からつま先までの全身を表した「全身像」タイプに分けられる。葦を束ねて芯を作り，その上に石灰の漆喰を塗って造形し，最後に着色や象嵌を施して仕上げられている。目はビチュメン（天然アスファルト）で描かれている。第 2 の穴蔵からは，1 つの胴体に 2 つの頭が付いた像も出土している。第 1 穴蔵の像はウエストがくびれていたりするなどかなり写実的に人体を表現しており，明らかに女性を表しているものもある[5]（図 2-a）。それに対し，第 2 穴蔵の像は胴体が平たい箱形で，足が付いているものもあるが手はない。また大きさも違う。第 2 穴蔵では最も大きい像は高さが 104cm に達するが，第 1 穴蔵では最高でも 90 cm 強にすぎない［Grissom 2000 : 28］。穴蔵の中に平らに積み重ねた状態で発見されたので（図 2-b），像は常時神殿に安置されていたのではなく，祭儀の時などに一時的に立てられ（図 2-c），後は収納されていたと考えられる［Cauvin 2000 : 112］。

さて問題は，これらの像が何を表していたのかということである。一部の像の足の指が 6 本［Ibid.］とか，手の指が 7 本［McCarter 2007 : 161］とか，異常な指の数が報告されてい

4）　たまたまその時この遺跡を訪れていた英国の考古学者ダイアナ・カークブライド Diana Kirkbride は，その発見物を見てただちにイェリコで 1935 年に発見された同じような像を思い出したと，のちにカスリン・タッブ Kathryn W. Tubb に語ったという［Tubb 2001 : 47］。たしかにイェリコでも発見されていたのだが，あまりにも断片的で［Amiran 1962 : 23 ; Grissom 2000 : 26］，また保存修復技術も発達していなかった時代のことゆえ，同じイェリコで出土した有名な頭蓋骨像ほどは注目されなかった。

5）　小さいながらも乳房を付けている像は女性と判定できるが，それ以外の像は女性の特徴を備えていないから男性だろうと一般に解釈されている。

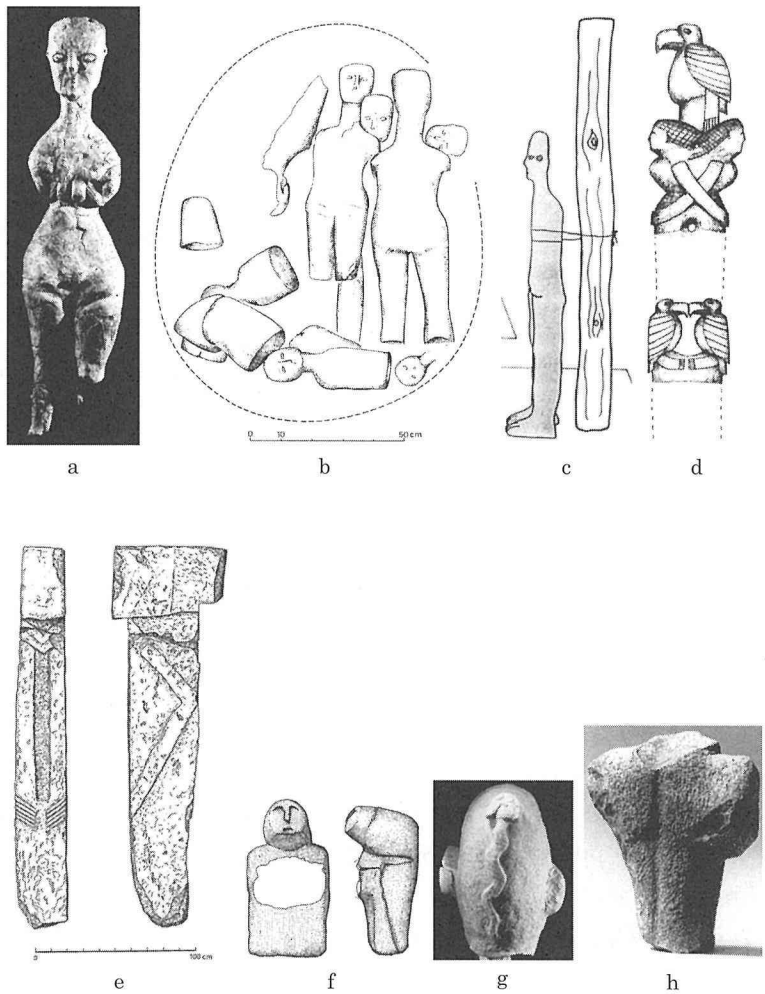

図2

る。これをコヴァンは超自然的存在の象徴とみなし，神性あるいは「神格化された聖書の英雄 deified biblical heroes」を特徴づけるものとしている［Cauvin 2000 : 113］。ただしコヴァンがその英雄の例として挙げている『旧約聖書』の6本指の巨人たちレファイムは，ダビデの敵として登場するので，「聖書の英雄」という表現は当たらないであろう（「サムエル記」21：20）。

一方，マッカーターは，イスラエル人が自分たちの村を建設するときにたまたまアイン・ガザルのような新石器時代の像を掘り出してしまい，それに影響を受けて聖書の6本指を生み出したのであろうと考えている［McCarter 2007 : 162-4］。この考えは臆説の域を出ないであろうが，同時にまた彼女は像の意義についてもう少し妥当な意見を述べている。第一にイェリコで石灰を塗って化粧した頭蓋骨が埋納されていることと関連付けて，これらの像も祖先崇拝の対象とする説を提示している。もう1つの可能性として豊穣あるいは交替する季

節を表す神像とする説については，女性を強調する特徴に乏しいことから否定的である。さらに悪霊などの呪物崇拝の対象としての可能性や，氏族の祖先を表すトーテムとする説も紹介するが，そのような意義付けよりもそれらが公的に展示されて共同体の宗教が発達してきたことを示している点こそが重要であると述べている［McCarter 2007 : 164］。傾聴すべき見解であろう。

これらの像が置かれていた施設を何と呼ぶべきかという用語の問題にも，関心が集まっている。ロレフソンは，氏族単位の宗教儀礼を行なうところであれば，「shrine 祭祀所」あるいは「kinship cult building」が妥当であろうが，もし大きな複数の共同体の宗教センターを統合するような場であったなら「large ritually associated buildings」，あるいは今日の「temple 寺院」でもよいだろうとしたうえで，「communal cult building 共同体祭祀所」あたりが無難であろうと述べている［Rollefson 2005 : 10］。この問題は後述するネヴァル・チョリやギョベクリ・テペでも大きな問題となっている。

Ⅳ　ネヴァル・チョリ Nevalı Çori（アナトリア東南部）

1980 年代にトルコ領のユーフラテス川にダムを建設するために生じる水没予定地域で，ハイデルベルク大学を中心とする調査団が緊急調査を行った。そのうちの 1 つの遺跡ネヴァル・チョリで，文字通り等身大かそれ以上の大きさの石像が発見された（遺跡は現在完全に水没してしまった）。アナトリア東南部，シャンル・ウルファ（以下，ウルファと表記）県の北端に位置する。年代は PPNB の中期に属し，前 8600～8000 年とされている［Hauptmann 2007 : 86］。

この遺跡は集落址ではあるが，中に数戸，一般居住用とは思われない，礼拝所あるいは「寺院」とも呼ばれる部屋が存在した。そのような部屋の石壁に，複数の T 字形石柱が埋め込まれていたが，そのうちのいくつかには明らかに人間の腕と手が浮彫されているため，人間を表していると判断された（図 2-e）［Hauptmann 1993 : 57］。それだけでなく，より写実的に人間を表現した石像や，頭部，胸部の断片（図 2-f, h）が発見された。スキンヘッドの頭像には辮髪のような蛇が浮彫されており（図 2-g），また鳥（ハゲタカ？）と人間を重ねたトーテムポールのような石柱（図 2-d）も出土しているため，人と動物の結合が何らかの意味を持っていたと思われる［Hauptmann 1993 : 60］。

これらの石柱・石像を広くユーラシアの石像表現の中で見比べると，いくつか気が付く点がある。1 つは四角柱の T 字型石柱において体の正面（と背面）に当たる面の幅が，側面よりも狭いという点である。これは実際の人体とは逆なのではないか。なぜこのような表現になるのか，謎と言わざるを得ない。時代も地域も全く違うが，モンゴル高原を中心とした地域で前 2 千年紀末から前 1 千年紀初にかけて製作された鹿石のうち四角柱タイプのものは，やはり正面（と背面）が狭く，側面の方が幅広い［林 2005 : 151-155］。

2つ目は，丸彫り的な石像の顔の表現である。眉と鼻が一体化して表現され，鼻の両側が低く削られている。これは顔を単純に表現する際にはしばしば採用される方法であろう。その後の各地の石像にも見られる特徴である。3つ目は，頭部が下の胴部よりも大きく出っ張っている点である。頭部を強調する表現は，北アジアの一部の鹿石や中近世のテュルク系イスラームの墓石にも認められる。

これらの共通点はお互いに影響しあって生まれたというものではなく，人類社会で大型石像を作成するときにどこにでも起きる可能性がある特徴とみなすべきであろう。

V　ギョベクリ・テペ Göbekli Tepe（アナトリア東南部）

ネヴァル・チョリよりもさらに衝撃的な遺跡が発見された。それがギョベクリ・テペである。ウルファ市から北東へ約 15km のところにあり，ネヴァル・チョリ遺跡からは南東に約 50 km に当たる。1995 年以来ドイツ考古学研究所のクラウス・シュミット[6]が中心となって発掘を続けている。

この遺跡は「テペ」と名付けられてはいるが，西アジアによくある住居址が何層にも重なって形成された遺丘ではない。住居址風の遺構は，自然の丘に直接 3 m 以上深く掘りこんで作られている［Schmidt 2000 : 46］。2008 年度までに A 号から D 号まで 4 基の円形石囲いが発見され[7]，そのうち最大の D 号石囲いは直径が 20 m に達する［Schmidt 2012 : 157］（図 3-a）。石囲いというよりは，石垣という方が適切かとは思われるが，ネヴァル・チョリと同じくその石囲いにはいくつもの T 字型石柱が嵌め込まれ，中心には一対の T 字型石柱が立てられている（図 3-b）。D 号石囲いの中心の石柱がとりわけ大きく，高さが 5.5 m に達する（図 3-e）。

石柱の表面には様々な動物が浅くあるいは高く浮彫されている（図 3-d）。最も多く見られる動物は蛇で（図 3-c），それに次ぐのが狐である［Schmidt 2011 : 927-928］。18 号石柱には，両腕とベルトのような表現の下に狐の毛皮のようなものが下がっている（図 3-e）。シュミットはこれを狐皮の「loincloth ふんどし」と判断している［Schmidt 2011 : 928］。実際に出土する動物骨にも狐の骨が多い。西アジアではこれより前の旧石器時代や，これより後の青銅器時代には狐の骨は稀にしか見られないため，この現象はきわめて特異と言わざるを得ない。シュミットもなぜ狐が重要視されているのか明確な答えを見つけることができていない［Schmidt 2012 : 188］。

T 字型石柱は，どのような役割を持っていたのだろうか。上部の前後に突出した部分が頭であることは容易に想像されるが，人面は表現されていない。性差を表すものも示されて

6）惜しくも 2014 年 7 月に急逝した。

7）その後，E 号，F 号，G 号石囲いが検出されているが，詳細な分析はなされていない［Schmidt 2010 : 240］。さらに H 号も発見された［Dietrich 2014 : 14］。

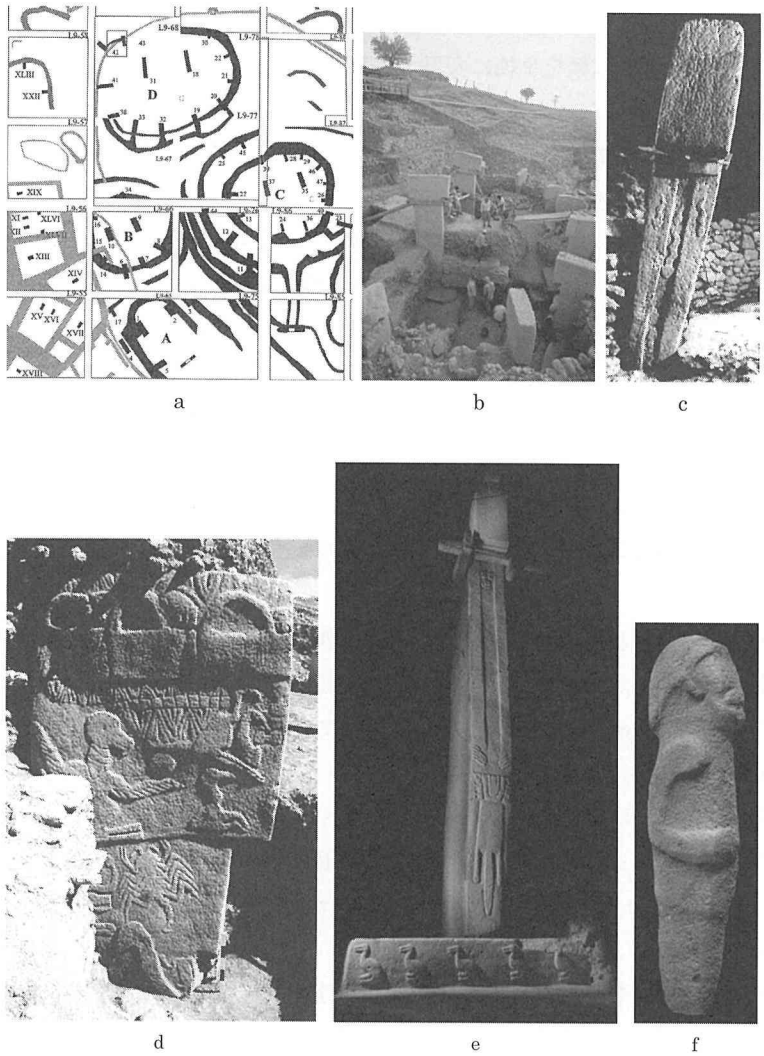

図3

いないが，18号石柱に見られるベルトとバックルは男性を示すものではないかという説もある［Schmidt 2010 : 245］。石囲いの中心に一対で立っているところから，双子か兄弟・姉妹を表し，何らかの神話を反映しているのではないかと推測しているが［Schmidt 2010 : 244］，今のところ裏付けるものはない。

性別を表示する石柱は少ないが，いずれにしても新石器時代の遺跡によく見られる多産豊穣の象徴としての女性像がギョベクリでは発見されていない。そのことからシュミットはこの遺跡を「多産豊穣」=「生」とは反対の概念，すなわち「死」と向き合うための場所だったのではないかと考えている［Schmidt 2012 : 121］。しかし線刻画ではあるが性器を表した女性の図も発見されているので［Schmidt 2012 : 223, Fig. 104］，この説も素直にはうなずけない。

またネヴァル・チョリ出土の「トーテムポール」風の石柱も出土している。各石囲いの埋土の中から出土した4点の等身大の人頭像（図4-a）は，「トーテムポール」の一部であろうとシュミットは考えている［Schmidt 2012 : 94, Fig. 27］[8]。そしてその役割については「guardian 守護者」と考えている［Schmidt 2010 : 248］。さらに男根が大きく突き出た石像（図4-b）や，やや上を向いてあごひげを生やした写実的な像も出土している（図3-f）。後者は2008年の出土だが，まだ出土状況は明らかにされていない。シュミットはこの像がやや上を向いていることから，シュメールの祈祷者小像と比較している［Schmidt 2010 : 249］。

この遺跡には住居址の床面から判断される層位はないが，遺構内の堆積物により，表層のⅠ層と，遺構に関係するⅡ層，Ⅲ層とに分けられている。このうち，Ⅱ層はPPNBの初期から中期に相当し，較正年代で前8800～8000年，Ⅲ層はPPNAからPPNB初期に相当し，前9500～8800年とされている［Schmidt 2011 : 921 ; *Vor 12.000* : 268-269］[9]。とにかくこの遺跡からは土器は全く出土せず，石器はほとんどがフリント製のPPNAに属するタイプであり，出土する動物骨・植物遺存体もすべて野生種なのである［Schmidt 2000 : 47］。その生業形態は，農耕牧畜への道を進み始めたとは言っても，まだ狩猟採集の段階にあったと言わざるを得ない［Schmidt 2011 : 917-918 ; 三宅 2012 : 4］。A～D号の大型円形遺構はすべてⅢ層に属し（E～G号はどちらの層に属するか決定されていない），そこにある石柱は高さが平均で3.5 mある。それに対し，Ⅱ層の遺構は小さな方形で，そこに立つ石柱も平均で高さが1.5 mと低い［Schmidt 2010 : 241］。

以上すべてのことを総合して，シュミットはこの遺跡を集落址ではなく純粋に宗教的目的のためにのみ造られた，世界最古の寺院，山上祭祀遺跡であると喧伝している［Schmidt 2012の原著のタイトル ; Scham 2008］。また移動する狩猟採集社会から定住集落型社会へと移行する過程で人類の精神面でも宗教観念や象徴性の記号化が起こったとするコヴァンの説［Cauvin 2000］を証明する遺跡として評価している［Schmidt 2010 : 253］。さらにバール・ヨセフは，ギョベクリ・テペ文化に一時的な階級社会と「chiefdom 首長制」の出現を見出している［Bar-Yosef 2014 : 165］。

これに対して，コルニェンコはシュメール・アッカド時代になっても「寺院」に相当する用語はまだなく，「家」と呼ばれていただけなのだから，ましてやPPN期の建物に「temple」という用語を適用することは問題だとしている［Kornienko 2009 : 95］。またフォレスはネヴァル・チョリの「寺院」についてだが，集会所が礼拝の場所として使用されていただけであって，「寺院」とは言えず［Forest 1996 : 28］，重大な時代錯誤であると断じた［Forest 1999 : 2］。バニングも，ギョベクリの建物が人々の多大な労力を要したものである

8）ただし別の論文では，後述する写実的な「ウルファの像」（図4-d）のような等身大の石像の一部とする説を唱えている［Schmidt 2010 : 248-249］。

9）2013年に発表された報告では，D号石囲いの建設は較正年代で前9500年頃とされている［Dietrich 2013 : 41］。

ことは認めつつも，PPN 期の崇拝行為は日常生活の一部であったとして，「寺院」の存在を否定している［Banning 2011 : 639-640］。この論争は，日常生活を強調するニュー・アーケオロジー派と「史上最古」を強調するアンチ・ニュー・アーケオロジー派との争いのようにも見える。

この問題に関しては，T 字型石柱も一役かっている。石囲いの中心に立つ大型石柱から石囲いの中に埋め込まれた小型石柱に向かって放射状に梁が渡され，その上に屋根が掛けられていたのではないかという復元例が推定されている［Banning 2011 : 630］。もし屋根がなければ日常的に使う住居とは言えないから特別な時にだけ使う祭祀的施設としか考えられないが，屋根があれば日常的に使う住居の可能性も出てくるからである。ただし屋根があっても，宗教的施設としておかしくはないが。この論争に関する賛否両論は，バニングの論文に付されたコメント集に詳しい。この遺跡からは絵文字のようなものが刻まれた押型印章のようなものも見つかっており，PPN 期の人々の精神構造や知的生活に関する議論がかまびすしい[10]。

Ⅵ　アドゥヤマン，ウルファ県など（アナトリア東南部）

ウルファよりもやや北に位置するアドゥヤマン Adıyaman 県でも，小型の T 字型石柱が発見されている（図 4-c）。アドゥヤマン市から東へ約 25 km，キリシク Kilisik という村の近くで 1965 年に発見されたが現物は行方不明となり，レプリカだけが知られている［*Vor 12.000* : 276］。高さは 80 cm と小さいが，正面が狭くて側面の方が広い点や，側面に肘を曲げた腕が浮彫されている点も，ギョベクリやネヴァル・チョリの T 字型石柱と同じである。正面の下部に見られる浮彫について，展覧会のカタログは「小さな人間の体の頭部をつかんでいる」と解説しているが［*Vor 12.000* : 276］，上記のギョベクリ 18 号石柱と同じく「狐のふんどし」と見た方がよいだろう。

T 字型石柱は，最近ウルファ市より東方のいくつかの遺跡でも見つかっている［Schmidt 2012 : 192］。それは，ウルファから北東へ 65 km，シヴェレク郡のタシュル・テペ Taşlı Tepe［Çelik *et al.* 2011］，ウルファから東へ 63 km，テクテク山にあるカラハン・テペ Karahan Tepe（図 4-d）［Çelik 2011］，ウルファから東へ 91 km，ヴィランシェヒル郡にあるセフェル・テペ Sefer Tepe［Güler *et al.* 2012］である。ギョベクリ・テペが脚光を浴びて以来，まさに雨後の筍のごとく T 字型石柱が発見されている。今後もますます増えて行くことだろう。

T 字型石柱よりもさらに驚くべき発見が，ウルファ市のど真ん中で行われていた。1993 年にハウプトマンがウルファ博物館を訪れたところ，収蔵庫にしまわれていた石像を見せら

10）祭祀遺跡説を支持する資料が新たに発表された。科学的分析からビールが醸されていた可能性が指摘され，祭儀の際に酒宴が開かれたと推定されている［Dietrich 2012 : 687］。

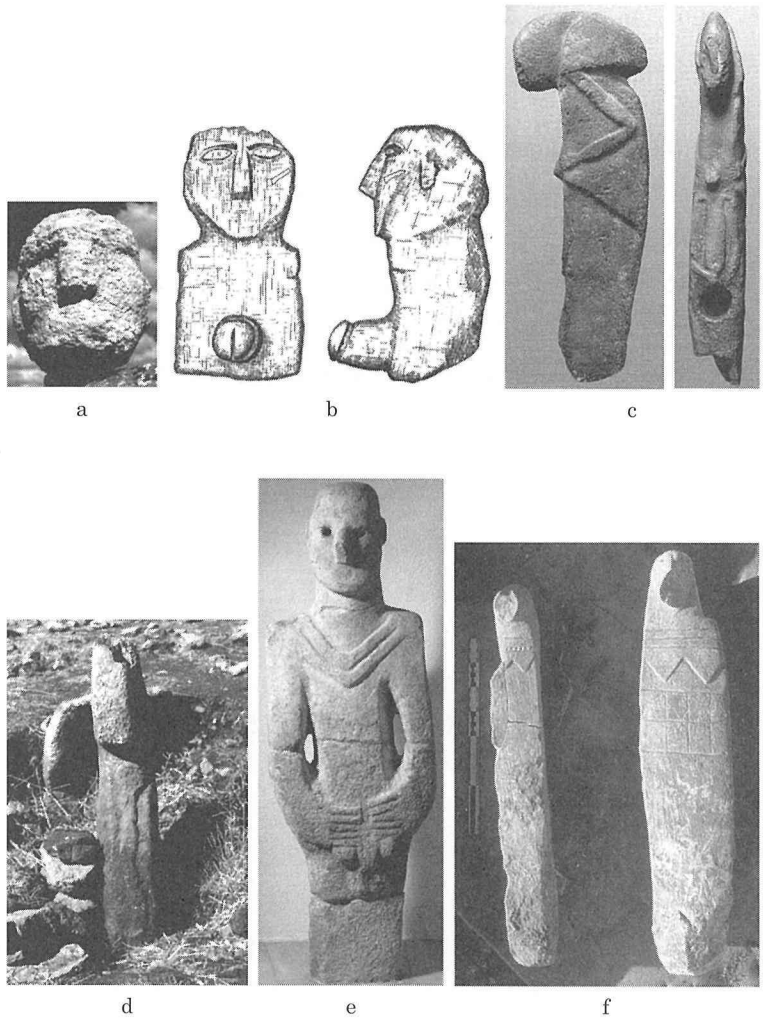

図 4

れた。それは旧市街中心部のバルクルギョル Balıklıgöl（魚のいる池の意味）のほとりで1980 年代に駐車場を建設中に発見されたものだという［Schmidt 2012 : 191］。そのためこれは「ウルファの像」とも，「バルクルギョルの像」とも呼ばれている（図 4-e）。高さは 193 cm と，等身大以上ある。眼窩には黒曜石が嵌め込まれ，両耳がわずかに突出している。この耳の表現は，ネヴァル・チョリ出土の蛇が後頭部に浮彫された頭像の耳に類似している（図 2-g）。鼻先は欠けとれており，口は表されていないが，削られたようにも見える。胸元には二重の V 字型の襟のような装飾あるいはネックレスが見える[11]。両腕は胴体から分離

11）ギョベクリ・テペの 2012 年の調査で，等身大よりはかなり小さいが（首なしの上半身だけの断片で高さ約 25 cm），やはり首に V 字型の刻文が見られる石像が発見された。なお，この小石像には胸部に肋骨のような文様も見られる［Dietrich 2014 : 16］。

して表現されており，両手で男根を持っているように見える。下部は地面に差し込むためか柱状に作られている。

「魚の池」はすぐ近くにあるアブラハム（イブラヒーム）生誕の洞窟とともにイスラームにおいても聖地とされ，またその周りも旧市街の建物が密集しており，いずれにしても発掘調査などはできない場所であった。しかし1997年に池の北側で道路建設の際に緊急発掘が行なわれ，そこに集落址があることがわかった。調査の結果，土器片は1点も出土せず，239点のフリントと15点の黒曜石の石器が出土した。それはPPNAないしPPNA～初期PPNBのもので，後期PPNBに属するものはなかった［Çelik 2000 : 5 ; Schmidt 2010 : 247］。すなわちギョベクリ・テペのⅢ層，前9500～8800年に相当する。そこでこの石像は，「世界最古の完璧に残った等身大の人間像」という評価を与えられている［Schmidt 2012 : 191］。

トルコから国境を越えてシリア領でも，PPNAからPPNB期にかけての石像が発見されている。ユーフラテス川に沿って南下し，シリア領に入ってすぐのところにあるジェルフ・エル・アフマル Jerf el-Ahmar 遺跡にも円形の石壁を持つギョベクリ・テペのような遺構があり，そこで石柱が出土した（図4-f）。これを報告者は「stéle zoomorphe 動物型石柱」と表記し，「rapace 猛禽」を想わせるとしている［Stordeur *et al.* 2000 : 40］。たしかに欠けとれた鼻先は鳥の嘴のようにも見えるが，胴体は石柱状でむしろ人間に近い。報告には寸法が記載されていないが，写真に写っているメジャーを見ると，大きい方は170～180 cmくらいはありそうだ。

お　わ　り　に

最後にいくつか問題点を指摘しておこう。新石器時代の最も古い段階で，早くも等身大かそれ以上の大きさの写実的な人間像と人体を単純化したT字型石柱の2つのタイプが登場していることがまず注目される。そして性別のわかるものは，そのすべてが男性像である。これまで旧石器時代から新石器時代にかけて，人間像と言えばいわゆる「旧石器のヴィーナス」か，チャタル・ヒョユクの地母神像のような，豊満な多産豊穣のシンボルとしての女性像が主流であり，当時の社会は母系制と思われていたが，そのような単純な解釈では理解できないことが明らかとなってきた。

次に，これらの大型石柱や人間像が作られた社会の生業形態が問題となっている。PPNAということは，つまり集落は形成するようにはなっていたが，まだ農耕や牧畜は始まっておらず，狩猟・採集の段階にあったということを意味する。そのような社会で高さ5 mもの石材を切り出してきれいな形に加工し，装飾を施す高度な技術・芸術性があったのだろうか。

さらに，これらの石像が置かれていた場所が専用の宗教的施設，すなわち今日の言葉でいえば「寺院」とか「神殿」と呼ばれるようなところなのか，それとも日常生活が送られていた住居なのかという問題については，激しい論争が巻き起こっている。とりわけギョベク

リ・テペに関しては，遺跡全体が「寺院」なのかどうかという問題に発展している。残念ながら片方の当事者であるクラウス・シュミットが急死してしまったので，論争が尻すぼみになってしまうのではないかと懸念される。

西アジアでは人間像はMPPNB（先土器新石器時代中期）のアイン・ガザルなどを最後に，LPPNB（先土器新石器時代後期）になると消えてしまう［Grissom 2000: 45］。アイン・ガザルではPPNCの発掘区をかなり広くして調査したにもかかわらず，どのような宗教儀式用の建物も発見されなかった［Rollefson 2005: 11］。それはいかなる理由によるものなのか。それからかなりの時間と空間を隔てて登場するバルカン北部やマルタ島の石像は，それらとまったく関係なく出現したのだろうか。

その後，青銅器時代に入ると，西アジアのほぼ全域，地中海の主として北岸と黒海沿岸やそこからやや内陸に入った地域に，ほぼ一斉に石像が出現する。これについては稿を改めて紹介するつもりである。

図版解説

図1：a—マルタ島，タルシエン遺跡平面図［Cunliffe 2008］；b—ジュガンティーヤ遺跡出土，「蛇の石柱」［Abell 2007］；c—タルシエン遺跡に立つ石像下部（レプリカ）［林撮影］；d—タルシエン遺跡出土，石像下部，マルタ国立考古学博物館蔵［林 撮影］；e—ゼッブージュ5号墓出土，人頭像［Trump 2002］；f—レペンスキ・ヴィル，Ib層，28号住居址出土，高22 cm［Srejović 1972］；g—レペンスキ・ヴィル，人頭像，Ic層，40号住居址出土，高14 cm［Srejović 1972］；h—レペンスキ・ヴィル，石像，II層，44号住居址出土，高51 cm［Srejović 1972］。

図2：a—アイン・ガザル出土女性立像，高60 cm［藤井 2000］；b—アイン・ガザル第2穴蔵［Cauvin 2000］；c—アイン・ガザル，立像設置推定図［Grissom 2000］；d—ネヴァル・チョリ出土，「トーテムポール」風の石柱（推定復元），中の人間胸部は高60 cm［Schmidt 2012］；e—ネヴァル・チョリ出土，T字型石柱，高約240 cm［Hauptmann 1999］；f—「鳥人間」，顔は人間だが頭と体は鳥だと発掘者は判断している，高23cm［Hauptmann 2007; Schmidt 2012］；g—蛇が浮彫された後頭部，高27 cm［Hauptmann 2007］；h—胸像，高37 cm［Hauptmann 1993］。

図3　ギョベクリ・テペ：a—中心部の遺構［Schmidt 2011］。濃い色はⅢ層，薄い色はⅡA層を示す；b—D号石囲い［Schmidt 2010］；c—A号石囲い，1号石柱正面，蛇の浮彫，高3.15 m［Schmidt 2012］；d—D号石囲い，43号石柱の右側面［Schmidt 2007］；e—D号石囲い，18号石柱［Schmidt 2012］；f—やや上を向いてあごひげを生やした像，高66 cm［Schmidt 2010］。

図4：a—ギョベクリ・テペ出土，人頭像，高23 cm［Schmidt 2012］；b—ギョベクリ・テペ出土，男根を強調した像，高40 cm［Schmidt 2012］；c—アドゥヤマン，キリシク出土，T字型石柱，高80 cm［*Vor 12.000*］；d—カラハン・テペ，狭い面に蛇が浮彫されたT字型石柱

[Schmidt 2012]；e—ウルファ，バルクルギョル出土，石像，高 193 cm［*Vor 12.000*］；f—ジェルフ・エル・アフマル，「動物型石柱」[Stordeur *et al.* 2000 : 40]。

参考文献

Abell, N. (2007) The Role of Malta in Prehistoric Mediterranean Exchange Network (Dissertation). Indiana University.

Amiran, R. (1962) Myths of the Creation of Man and the Jericho Statues. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 167, 23-25.

Banning, E. B. (2011) So Fair a House : Göbekli Tepe and the Identification of Temples in the Pre-Pottery Neolithic of the Near East. *Current Anthropology* 52(5), 619-660.

Barrowclough, D. A. (2007) Putting Cult in Context : Ritual, Religion and Cult in Temple Period Malta. In : D. A. Barrowclough & C. Malone (eds.), *Cult in Context : Reconsidering Ritual in Archaeology*. Oxford : Oxbow Books. 45-53.

Bar-Yosef, O. (2014) Was Göbekli Tepe Culture a Chiefdom That Failed? In : B. Finlayson & Ch. Makarewicz (eds.), *Settlement, Survey, and Stone : Essays on Near Eastern Prehistory in Honour of Gary Rollefson*. Berlin : ex oriente. 159-168.

Beile-Bohn, M., Ch. Gerber, M. Morsch, K. Schmidt (1998) Neolithische Forschungen in Obermesopotamien : Gürcütepe und Göbekli Tepe. *Istanbuler Mitteilungen* 48, 5-78.

Bonanno, A. (1999) The Rise and Fall of Megalithism in Malta. In : K. W. Beinhauer *et al.* (eds.), *Studien zur Megalithik : Forschungsstand und ethnoarchäologische Perspektiven*. Weissbach. 99-112.

Bonsall, C. *et al.* (2008) Dating Burial Practices and Architecture at Lepenski Vir. C. Bonsall *et al.* (eds.), *The Iron Gates in Prehistory : New Perspectives (BAR International Series 1893)*. Oxford. 175-204.

Borić, D. (2002) The Lepenski Vir Conundrum : Reinterpretation of the Mesolithic and Neolithic Sequences in the Danube Gorges. *Antiquity* 76, 1026-1039.

Borić, D. (2005) Body Metamorphosis and Animality : Volatile Bodies and Boulder Artworks from Lepenski Vir. *Cambridge Archaeological Journal* 15(1), 35-69.

Cauvin, J. (2000) *The Birth of the Gods and the Origins of Agriculture*. Cambridge. Translated by T. Watkins.（原著はフランス語，*Naissance des divinités, naissance de l'agriculture* by CNRS editions 1994).

Cunliffe, B. (2008) *Europe between the Oceans*. Yale University Press.

Çelik, B. (2000) An Early Neolithic Settlement in the Center of Şanlıurfa, Turkey. *Neo-Lithics (The Newsletter of Southwest Asian Neolithic Research)* 2-3 : 4-6.

Çelik, B. (2011) Karahan Tepe : A New Cultural Centre in the Urfa Area in Turkey. *Documenta Praehistorica* XXXVIII, 241-253.

Çelik, B. *et al.* (2011) A New Pre-Pottery Neolithic Settlement in Southeastern Turkey : Taşlı Tepe. *Anadolu (Anatolia)* 37, 228-236.

Evans, J. D. (1959) *Malta.* New York : Frederick A. Praeger.

Dietrich, O., *et al.* (2012) The Role of Cult and Feasting in the Emergence of Neolithic Communities. New Evidence from Göbekli Tepe, South-eastern Turkey. *Antiquity* 86, 674-695.

Dietrich, O., *et al.* (2013) Establishing a Radiocarbon Sequence for Göbekli Tepe. State of Research and New Data. *Neo-Lithics* 1/13, 36-41.

Dietrich, O., *et al.* (2014) Göbekli Tepe. Preliminary Report on the 2012 and 2013 Excavation Seasons. *Neo-Lithics* 1/14, 11-17.

Forest, J.-D. (1996) Le PPNB de Çayönü et de Nevalı Çori : pour une approche archéo-ethnologique de la néolithisation du Proche-Orient. *Anatolia Antiqua* 4, 1-31.

Forest, J.-D. (1999) *Les premiers temples de Mésopotamie (4e et 3e millénaires) (BAR International Series 765).* Oxford.

藤井純夫 (2000)「西アジアの先史美術」田辺勝美, 松島英子編『世界美術大全集, 東洋編, 16：西アジア』小学館, 333-342.

藤井純夫監修 (2004)『沙漠の王国ヨルダン展』NHK.

Gimbutas, M. (1999) *The Living Goddesses.* Berkeley and Los Angeles.

Grissom, C. A. (2000) Neolithic Statues from 'Ain Ghazal : Construction and Form. *American Journal of Archaeology* 104, 25-45.

Güler, M. *et al.* (2012) New Pre-Pottery Neolithic Settlements from Viranşehir District. *Anadolu (Anatolia)* 38, 164-180.

Harmanşah, Ö. (2011) Monuments and Memory : Architecture and Visual Culture in Ancient Anatolian History. In : S. R. Steadman *et al.* (eds.), *The Oxford Handbook of Ancient Anatolia : 10,000-323 B. C. E.* Oxford. 623-651.

Hauptmann, H. (1988) Nevalı Çori : Architektur. *Anatolica* 15, 98-109.

Hauptmann, H. (1993) Ein Kultgebäude in Nevalı Çori. M. Frangipane *et al.* (eds.), *Between the Rivers and over the Mountains : Archaeologica Anatolica et Mesopotamica Alba Palmieri Dedicata.* Roma. 37-69.

Hauptmann, H. (1999) Frühneolithische Steingebäude in Südwestasien. K. W. Beinhauer *et al.* (eds.), *Studien zur Megalithik : Forschungsstand und ethnoarchäologische Perspektiven.* Mannheim/Weissbach. 227-238.

Hauptmann, H. (2007) Nevalı Çori. In : *Vor 12.000 Jahren in Anatolien : Die ältesten Monumente der Menschheit.* Badisches Landesmuseum : Karlsruhe. 86-87.

林俊雄 (2005)『ユーラシアの石人』雄山閣.

Kornienko, T. N. (2009) Notes on the Cult Buildings of Northern Mesopotamia in the Aceramic Neolithic Period. *Journal of Near Eastern Studies* 68(2), 81-101.

Luckert, K. W. (2013) *Stone Age Religion at Göbekli Tepe From Hunting to Domestication, Warfare*

and Civilization. Triplehood.

Malone, C. (2008) Metaphor and Maltese Art : Explorations in the Temple Period. (Pre-contract proof copy 2008). Queen's University, Belfast. 1-37.

Malone, C. *et al.* (2009) *Mortuary Customs in Prehistoric Malta : Excavations at the Brochtorff Circle at Xaghra* (1987-94). Oxford : McDonald Institute for Archaeological Research.

McCarter, S. F. (2007) *Neolithic*. New York : Routledge.

Mithen, S. J. (1994) The Mesolithic Age. In : B. Cunliffe (ed.), *The Oxford Illustrated History of Prehistoric Europe*. Oxford. 79-135.

三宅裕 (2012)「新石器時代の神殿？ 農耕・牧畜以前の聖域について」『西アジア考古学フォーラム 2012』日本西アジア考古学会, 2-7.

Renfrew, C. (1972) Malta and the Calibrated Radiocarbon Chronology. *Antiquity* 46, 141-145.

Renfrew, C. (1973) *Before Civilization : The Radiocarbon Revolution and Prehistoric Europe*. London : Jonathan Cape Ltd. (日本語訳：レンフルー著, 大貫良夫訳『文明の誕生』岩波現代選書, 1979 年)

Renfrew, C. (2007) Ritual and Cult in Malta and Beyond : Traditions of Interpretation. In : D. A. Barrowclough & C. Malone (eds.), *Cult in Context : Reconsidering Ritual in Archaeology*. Oxford : Oxbow Books. 8-13

Rollefson, G. O. (1983) Ritual and Ceremony at Neolithic Ain Ghazal (Jordan). *Paléorient* 9(2), 29-38.

Rollefson, G. O. (2005) Early Neolithic Ritual Centers in the Southern Levant. *Neo-Lithics* 2, 3-13.

Scham, S. (2008) The World's First Temple, *Archaeology* 61(6) : 22-27.

Schmidt, K. (1999) Frühe Tier- und Menschenbilder vom Göbekli Tepe — Kampagnen 1995-98 : Ein kommentierter Katalog der Grossplastik und der Reliefs mit zoologischen Anmerkungen von Angela von den Driesch und Joris Peters. *Istanbuler Mitteilungen* 49, 5-21, Taf. 1-11.

Schmidt, K. (2000) Göbekli Tepe, Southeastern Turkey. A Preliminary Report on the 1995-1999 Excavations. *Paléorient* 26(1), 45-54.

Schmidt, K. (2005) "Ritual Centers" and the Neolithisation of Upper Mesopotamia. *Neo-Lithics* 2, 13-21.

Schmidt, K. (2010) Göbekli Tepe : The Stone Age Sanctuaries. New Results of Ongoing Excavations with a Special Focus on Sculptures and High Reliefs. *Documenta Praehistorica* XXXVII, 239-256.

Schmidt, K. (2011) Göbekli Tepe : A Neolithic Site in Southeastern Anatolia. In : S. R. Steadman *et al.* (eds.), *The Oxford Handbook of Ancient Anatolia : 10,000-323 B. C. E.* Oxford. 917-933.

Schmidt, K (2012) *Göbekli Tepe : A Stone Age Sanctuary in South-Eastern Anatolia*. Berlin : ex oriente e. V. (原著のドイツ語版を増補, *Sie bauten die ersten Tempel : Das rätselhafte Heiligtum der Steinzeitjäger*. C. H. Beck, 2006).

Srejović, D. (1972) *Europe's First Monumental Sculpture : New Discoveries at Lepenski Vir*. New

York : Stein and Day.

Stordeur, D. *et al.* (2000) Les bâtiments communautaires de Jerf el Ahmar et Mureybet horizon PPNA (Syrie). *Paléorient* 26(1), 29-44.

Townsend, A. (2007) Ephebism in Maltese Prehistoric Art? In : D. A. Barrowclough & C. Malone (eds.), *Cult in Context : Reconsidering Ritual in Archaeology*. Oxford : Oxbow Books. 72-81.

Trump, D. H. (2002) *Malta : Prehistory and Temples.* Malta : Midsea Books.

Tubb, K. W. (2001) The Statues of 'Ain Ghazal : Discovery, Recovery and Reconstruction. *Archaeology International* 5, 47-50.

Turnbull, D. (2002) Performance and Narrative, Bodies and Movement in the Construction of Places and Objects, Spaces and Knowledges : The Case of the Maltese Megaliths. *Theory, Culture & Society* 19(5/6), 125-143.

Vor 12.000 Jahren in Anatolien : Die ältesten Monumente der Menschheit. Badisches Landesmuseum : Karlsruhe, 2007.

Warburton, D. A. (2005) Early Neolithic Ritual Centers. *Neo-Lithics* 2, 42-47.

（創価大学文学部）